

内村鑑三のコロンブスとの関わりを廻って

—— 時代的背景などを顧慮しながら ——

堀 江 義 隆

(一) はじめに

クリストファー・コロンブス (1451 ?/-46 ? ~1506) の所謂アメリカ大陸『発見』¹の評価に関しては、何世紀も前から「天地創造以来の大偉業」であるとか「人類史上の最も悲惨な出来事」という両極端のいわば「光」と「影」、つまり「功」と「罪」の両面が当初よりあり、それが歴史の進行とともに顕わになり、今日では「罪」の面がコロンブスの全てであるかのように促えられ、その反面の「功」の歴史的意義が無視される傾向が圧倒的に強くなってきている風潮が20世紀後半以降特に顕著になってきていることは、周知の事であろう。

筆者は、十年前の1992 (平成4) 年の3月中旬より向こう一年間「学際的観点」(“the interdisciplinary point of view”) からニューヨーク、マンハッタンにあるユニオン神学大学へ留学した。折しも、1992年はコロンブスのアメリカ大陸『到着』¹を告知する大いなる歴史的節目である「500周年記念」(“Quincenntennial Commemoration”) と凶らずも重なっており、²アメリカだけではなくニューヨークという世界的な場所柄をも加味してコロンブスの功罪を、特にその「罪」の面を大きくクローズアップして、新聞・TV等のマスメディアを通じて大々的に報じられる風潮を目のあたりにしたのである。³ 爾来、コロンブスが世界歴史において果たした役割、つまり今しがた述べたその功罪とは一体何であるかが筆者の念頭につきまとして離れないのである。

しかし、本稿ではそのコロンブスの功罪という大いなる問題全体に正面から取り組むのではなく、——コロンブス一人の人格において功罪自体を真二つに分離・分割して論じることは甚だ難しいことを弁えながらも——一応便宜的に「功」と「罪」に分け、今日コロンブス批判として論じられている植民地支配的な侵略・虐待などに絡む人権的立場上の「罪」の側面への立ち入りは、また機会を改めて取り上げることにしたい。そして、今回はむしろコロンブスが若年にして航海者になることの夢と希望と使命を自覚し、そのための専門的技術と知識を身につけ、しかも当時としては容易に信じることの出来なかった「地球球体説」⁴を確信し、またキリスト教の

布教活動をも念頭に置き、⁵ 世間の嘲笑・冷遇などの感情を乗り越えて、真一文字に突き進んで行ったいわば近代世界の幕開けに貢献した働きは看過し得ないであろう。

そのポジティブな側面を持つコロンブスを念頭に置き、筆者は明治初期のわが国へのプロテスタンティズムの受容・定着に当り、出色のユニークな野人的活躍で注目を浴びた無教会主義者の内村鑑三(1861~1930)におけるコロンブスの理解と学びを彼の生きた時代的背景などを視野に入れながら、考察を廻らしていきたい。

尚、この際序でながら内村鑑三と同時代人であるのみならず、札幌農学校(北海道大学の前身)の同期生でもあった親友の新渡戸稲造(1862~1933)のコロンブスとの関わりの場合についても、のちほど若干触れて置きたい。⁶

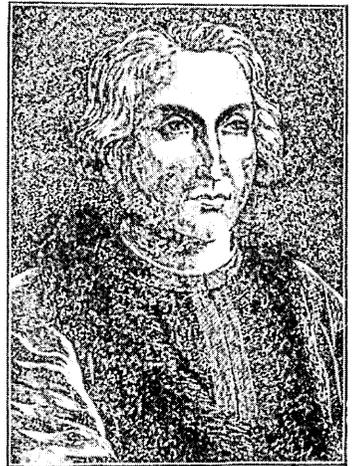
(二) アメリカ大陸『発見』後の三百年：100, 200, 300周年を迎えて

さて、内村鑑三とコロンブスとの関わりを見ていく前に、先ず1492年のコロンブスの第一回航海(1492年8月3日~1493年4月末)においてカリブ海のバハマ諸島のグァナハニ島に辿り着き、その島をサンサルバドル島⁷と命名した同年10月12日の歴史的出来事が、アメリカ大陸『発見』の端緒となったことは周知の事であろう。それ故にコロンブスが世界歴史に「近世」という時代の始まりを印する出発点を与えることは言うまでもない。

かくして、内村がコロンブスなる人物を強く意識し且つ注目することとなったのは、彼が1884(明治17)年11月に渡米した折においてであった。それは、^{まさ}正しくコロンブスのアメリカ大陸『発見』400周年(1892)を迎える機運が高まりつつあった時節においてである。

本項においては400周年以前の三世紀に亘る100, 200, 300の各百周年の時期を迎えるに当って夫々の世紀末時において取り沙汰される米国内における1492年のコロンブスの事績に対する社会的風潮なるものを次に見て行くことにしよう。それが^ま即世界歴史におけるコロンブスの足跡の評価を占うことになると思われるからである。

先ず、100周年(1592)前後は、15世紀初期のポルトガルのエンリケ航海王子(Henrique o Navegador: 1394~1460)の西アフリカ沿岸の探検を皮切りにコロンブスのアメリカ大陸『発



CHRISTOPHER COLUMBUS
コロンブス之肖像
『内村鑑三全集2』(岩波書店、1980年10月発行) 770頁

見』などを媒介にして、17世紀初めに至る「大航海時代」*の終焉間際と共に米国植民地時代到来直前のいわば夜明けの時である。コロンブスがスペイン王室のカトリック・キリスト教布教の大義名分を掲げてやってきてから、約百年の歳月が流れた頃でもあった。

次に、200周年（1692）前後は、特に米国は17世紀初頭においてイギリスのプロテスタントのピューリタンたちによる植民地開拓時代の延長線上にあり、所謂「西漸運動」(“the Westward Movement”)、即ち東部から西部への未開拓原野進出の定住地拡大に伴う先住民への圧迫・搾取がみられ、その動きはコロンブスの信奉したカトリックにバトンタッチするかのよう⁹に白人優位の側面が継承されているのが窺われる。

さらに、300周年（1792）前後は、米国は植民地時代から独立国家としての目鼻立ちが整えられたばかりであり、その十数年前の1776年には「独立宣言書」(“the Declaration of Independence”)を公布して、文字通り近代国家の仲間入りを果すことになった。そして、この国の首都¹⁰が初代大統領のジョージ・ワシントンの名前に因んで付けられたことは周知の事であろう。しかも、それと同格的に“D.C.”即ち“District of Columbia”つまり『コロンビア特別区』が付されて、この国の原点は、コロンビア——コロンブスの女性形——であることの示唆以外の何物でもないであろう（後述）。かくして、その正式呼称が『ワシントンDC』(“Washington, D.C.”)となり、この国は建国及び植民地時代以前の当初より何はともあれコロンブスを強く意識する国として、成立したことだけは紛れもない事実であろう。

蛇足ながら、300周年を迎えたことで、コロンブス効果の顕現と思われる事例を次に三つばかり挙げておこう。

一つは、ニューヨークにある1754年創設のキングズ・カレッジ（コロンビア大学の前身）に関してであろう。同カレッジは、コロンブスのアメリカ大陸『発見』300周年記念（Tercentennial Commemoration）を祝して、1884年にコロンビア・カレッジとなり、1896年にコロンビア・ユニバーシティに昇格した。

次に、ユニークかつポピュラーな事例として、ニューヨーク、マンハッタンの五番街（Fifth Avenue）で毎年イタリア系市民によって行われている恒例のコロンブスデー・パレード（Columbus Day Parade）の始まりが、1792年10月12日であり、その祝祭記念のハイライトとして、すっかりニューヨーク市民にお馴染みの行事となっている。しかし、これは白人コロンブスの優越性の誇示（デモンストレーション）であることだけは否めないであろう。特に、1992年の500周年を迎えるに当たり少数先住民のアメリカン・インディアンやヒスパニックなどから喧々囂々の猛反対があり、賛成派も反対派も夫々の立場を訴えるパレードを行い、すこぶる賑やかな

ことであつたようである。¹¹

最後、三つ目として挙げておかなければならないのは、米国内では建国当初、否それ以前からもコロンブスを自国の代表的人物にしようということの表れとして、彼の名前を国名(コロンビア、国名は通例女性名で表記)にする動きがあつたのであるが、1819年に南米のコロンビアが共和国として独立したために、その国名の採択は途中で立消えとなつた。もしもそれが実現していたならば、米国の正式呼称はむしろ現在の“U.S.A.”ではなく、コロンビア(Columbia)を表象する“U.S.C.”(the United States of Columbia)が世界中に広がり、大いに幅を利かせたことであらう。むしろ、そうであつた方がよりリーズナブルな手続きであつたといえよう。

(三) 内村鑑三の渡米と「コロンブス万国博覧会」

前項において、内村鑑三が渡米する以前に窺われるであろうと推察される米国における1492年以來の三百年に亘るコロンブスに対する評価の一端を記した。それは本稿(一)で示唆したように、コロンブスの世界歴史において果たした役割の功罪をめぐつての「功」に関わるポジティブなものであつたようである。その風潮が内村の渡米、否その先いやがて訪れて来る400周年(1892)に向けて益々高揚しゆく気配にあることは否応なく認めざるを得ないであらう。



1887(明治20)年ニューヨークにて撮影
【内村鑑三全集2】(岩波書店、1980年10月発行)の表紙裏より

そこで、次に内村鑑三が渡米の決意を固めた経緯を少し述べてみることにしよう。先に触れたように、内村が渡米したのは、1884(明治17)年11月である。時に、内村は札幌農学校を出て三年余、24歳の青年期の終りにさしかかっていた。内村の渡米の動機は、当時折しも半年余りで新妻浅田タケとの離婚問題が抜きさしならぬ破局に立ち至り、彼はクリスチャンとしてかなり精神的に衝撃を受けていた。その傷心を癒すために、その後の人生の身の処し方を巡り、聖書の真意を模索するためにかなりシリアスな思いを抱いて米国へ旅立つたのである。¹²

それは正に「求めよ、さらば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん」(“Ask, and it shall be given you; seek, and ye shall find; knock, and it shall be opened unto you.”)¹³の聖句を地で行くかのように、内村は真に生きるべき希望の幻を求めて、札幌農学校時代にキリスト教信仰の良き薫陶を受けた恩師ウィリアム S. クラーク博士の祖国である米国へ向け、求道者精神を以て、文字通りゼロからの出直しの思いを込めての出立となつたのであ

る。

内村の米国滞在は、三年半の短期間（1884.11～88.5）であった。傷心を抱いて渡米した内村にとって、彼より一足先に渡米している新島襄の斡旋で彼の母校のマサチューセッツ州アーモスト大学のJ. H. シーリー総長に紹介されて、同大学の選科生として渡米翌年の1885（明治18）年9月に入学を許可された。¹⁴そして同総長からは、口移し的に純福音の信仰的薫陶を受けて、真実のクリスチャンになるためのイエス・キリストの十字架の贖罪愛に目覚める回心体験を持たらしめられたのである。これは、浅田タケとの離婚問題に対する心の整理を決定的にクリアーにするために断固たるケジメをつけるかけ替えのない貴重なものであったであろう。その意味において、内村がはるばる米国までやって来たことは、神の摂理の御手の大いなる導きがあったといえよう。

一方、そのような個人的な立場を離れて米国社会を眺めやる時に内村の目には二つの事象が目にとまった。一つは、当時内村鑑三を取り巻くその社会の実情は産業革命以降の産業主義の影響による総じて低次の俗悪な金銭万能の風潮や人種差別の非キリスト教的偽善臭の強い空気に汚染されており、内村はかなり精神的に^{ショック}衝撃を受けていたようである。

そのような折も折、米国はコロンブスのアメリカ大陸『発見』400周年（1892）を記念して、シカゴでは一年遅れで1893（明治26）年に国威発揚を目指し、「コロンブス万国博覧会」（“World Columbian Exposition”）の呼称の下で開催された。通常、地名を冠するのが決まりであるのが、かように個人名（コロンブス）が地名にとって代って使われるケースは博覧会史上かつてなかったし、今後もないと断じてよいであろう。かくコロンブスの名前を冠することによって、いかに当時コロンブスの存在が飛ぶ鳥を落とすほどの人気を米国社会において持っていたかを端的に示す出来事であると言ってよいであろう。

それは米国社会挙げての国威発揚の誇示（デモンストレーション）として、目を見張らすものがあった。即ち、正式参加の46ヶ国以外に米国内の各州が加わった。ミシガン湖畔のジャクソン・パーク（Jackson Park）に作られた主要会場は「ホワイト・シティ」（“White City”）と呼ばれ、豪壮な白亜の殿堂群からなり、その脇に「ミッドウェー・プレザンス」（“Midway Pleasance”）と云う展示兼娯楽施設が作られたのである。これを見る限り、白人優位のワズプ（WASP）の実力が遺憾なく示されよう



1893年コロンブス博覧会（シカゴ）白で統一された会場はホワイト・シティとよばれた。シカゴの中心部と会場は高架電車で結ばれ、入口には自動改札機が登場した（小学館、『日本大百科全書 19』昭和63年1月刊行）

としているのが窺えるのではあるまいか。¹⁵

かくして、内村鑑三は1884年11月に渡米するやそのような雰囲気やそのような霧困気を逸早く察知しながら、彼はコロンブスなる人物に痛く思いを寄せると共に、当時欧米においてコロンブスに関する著述がアメリカ大陸『発見』400周年に向けて続々と物される風潮にいたく刺激を受けると共に、帰国後手ぐすねを引くかのように、その記念すべき年である1892年に照準をピタリと合わせて、コロンブスに関する著述を書き上げていったのが注目される。

(四) 内村鑑三のコロンブスに関する著述を廻って

さような次第で、渡米当時の在米期間中において、たとい内村鑑三がコロンブスに大いなる関心を抱いたとしても、白人優位の立場より書かれたコロンブスに関する伝記や研究書の時代的制約は如何ともし難かったことは先ず認めざるをえないであろう。

内村は、1887(明治20)年5月に、その前年の9月に入学したコネティカット州ハートフォード神学校での学びに飽きたらずに、同神学校を中退して帰国したのであるが、帰国後は就職など思うに任せない出来事が色々と重なり、筆舌に尽し難いいわば国中に枕する所無きまでの苦難をなめたのである。¹⁶

そのような最中であっても、内村のコロンブスに対する思いと情熱はいささかも消え去ることなく、ひたすら400周年の1892年10月12日に思いを馳せて、1892(明治25)年9月に大阪の泰西学館に招聘される直前のあわただしい折に、コロンブスに関する著述をものしたのである。下記に掲げるその著述一覧は、本学文芸学部『文学・芸術・文化』誌(第12号第1号)に掲載の筆者による研究ノート『内村鑑三とコロンブス』(122~134頁)からの転載であることを予め断っておきたい。[下線部は筆者による]

イ。「コロンブス文学」1892(明治25)年9月15日(『六合雑誌』141号「雑記欄」)

ロ。「コロンブスの行績」1892(明治25)年10月15日(『六合雑誌』142号)

ハ。「米国発見事業の事務官ピンズン兄弟」1892(明治25)年11月15日(『六合雑誌』143号)

ニ。「記念論文コロンブス功績」(1893(明治26)年2月)→『コロンブスと彼の功績』と改題(1899(明治32)年12月9日)

上掲の著述の発行年などからしても、内村がいかにコロンブスに深い関心を寄せていたかが窺える非凡なる好例といえよう。とにかく、上掲のイ・ロ・ハの著述は、一目瞭然いずれも『六合雑誌』誌上に掲載されたものである。そして、ニの「記念論文コロンブス功績」(1893)は、その前年に発表されたそれらの「コロンブスの行績」及び「米国発見事業の事務官ピンズン兄弟」

と新たに執筆した「コロンブス伝」¹⁷をもつけ加え、上掲の矢印(→)が示すように後年『コロンブスと彼の功績』(1899)と改題し、一書にまとめられた。(右掲の写真参照) 従って、内村のコロンブスに関するものを知る上においては、これを繙けばコロンブスに関する包括的な事柄についての内村の理解が得られるであろう。

尚、「研究ノート」にも記したことであるが、本書を廻るエピソードとして、内村が大阪に滞在中、——1892年(明治25)9月7日に組合系の大阪教会(宮川経輝牧師)が経営の責任を負った泰西学館に招聘され、同学館の経営不振で八か月後に閉校、退職。その後は熊本英学校へ—— 処



初版表紙 187×122mm
 『内村鑑三全集2』(岩波書店、1980年10月発行)76頁

『コロンブス功績』(明治32年「コロンブスと彼の功績」と改題)
 明治26年2月27日
 単行本
 署名 内村鑑三 著

女作『キリスト信徒の慰め』の発行直後に、第二作として『コロンブスと彼の功績』(1893)が、上述したように一書として刊行され、当時日本でも米国でのコロンブス万博開催のことが知れわたっており、コロンブスの知名度が高まりつつあった折でもあったので、内村自身この二書中前者よりも後者の方が内容上の大衆的幅の広さもあり、かなりの売れ行きを期待する向きもあったが、全く反対の結果となった。それどころか、七十種になんなんとする内村の物した書物の中でも最も売れ行きがよくない書の一つとなっているのである。これは一体何を意味するのであろうか。コロンブスの歴史における人気と不人気とが交錯する象徴的出来事のように思えてならない。世の人々のこの人物に寄せる思いと内村のそれとのギャップのようなものすら感じせしめられるのである。

(五) 内村鑑三の著述の内容と新渡戸稲造の場合に関して

先の第四項において、筆者は内村鑑三のコロンブスに関する著述にまつわる紹介的な事柄などを若干述べた。

事ここに至り、本稿の冒頭で内村が評価したコロンブスの功罪の「功」とは、一体何であるのかという問いが、自ずと頭をもたげてくる。そして今その著述を繙く時に、先ず目に留まるのが内村のコロンブス自身を肯定的に評する言葉、即ち「真性の巨人」とか「十五世紀の花なり、果なり」とか「人類の歴史に一大新方向を与えるものなり」などという激賞の言葉である。¹⁸

そして、それに引き続いて、内村が言わんとすることを「コロンブスの功績」¹⁹から要約すれば次の数点にまとめることが出来るであろう。筆者のコメントをいささか交えながら紹介することにしよう。

- (1)歴史家は、通常1492年10月12日(金)——アメリカ大陸『発見』の日——を以て、中世時代の終焉と認め、所謂『近代』の始まりという定説的見解があるが、内村はその説に完全に同意している。
- (2)コロンブスは、「地球球体説」の確固不動たる信奉者であった。無論、当時の世間一般の人々の見解とは異なるがゆえに、彼らから不毛の嘲りや中傷などに晒され、冷遇・批判にはよく耐え抜き、あの大『発見』の端緒を作ったことの評価は、いくら評価してもしきれぬものではないであろう。
- (3)コロンブスは、ヨーロッパより、インドを経て黄金の国ジパングー(日本)へ辿りつくという夢と希望を持ち——無論、これはコロンブスの探検・航海の大先輩のマルコ・ポーロ(1254~1324)の『東方見聞録』や地理学者トスカネリ(1397~1482)の見解による——それに基づき1492年スペインのパロス港より歴史的出帆の途についた。
- (4)上記(3)のジパングーへの思いが象徴しているように、コロンブスは黄金などの財宝を漁ることに異常な関心を示し、実際それゆえに未知の土地からの金鉱、その他豊富な天然資源が発見され自己の思いを充足させている。しかし、内村が心を打たれたのは、それらの富をコロンブスは私利私欲のためではなく、公共の反映のためにそれを求めたと解している。
- (5)コロンブスは、信仰深いキリスト教徒であり²⁰、アメリカ大陸『発見』は彼の信仰心の発露であり、彼はヨーロッパ以外の新天地にキリスト教を伝道することの使命に燃えていた。アメリカ大陸『発見』と共に、同大陸を「真理と自由と宗教の邦土」²¹と称しているのは、注目される。

内村鑑三は、以上の諸点を以て、コロンブスの「功」を打ち出し、彼を偉大な人物の範疇に入れるに足る人物としているのがありありと窺われるのではあるまいか。そして、もし『近代』という時代の牽引的役割を果たしたそのコロンブスなる人物の出現がなかったならば、内村はそのコロンブスの役割を演じる「もう一人のコロンブス」(“another Columbus”)の登場を期待すると言いたげな口吻すら伺われるのである。²²

尚、蛇足ながらここにいま一人内村鑑三と同時代人でコロンブスに対して内村に勝るとも劣らぬ関心を寄せている人物が存在することを指摘せねばならないであろう。

その人物とは新渡戸稲造（1862～1933）である。新渡戸は、1877（明治10）年に内村と共に札幌農学校に2期生として入学したいわば同期の桜であり、宣教師 M.C. ハリスより受洗し、キリスト教に入信、両者はいっそう親密な交わりを結ぶ。かくして、新渡戸は内村同様1881（明治14）年に同校を卒業。その2年後の1883（明治16）年9月に東京大学に入学するも、その学問的水準の低さにいたく失望し、1884（明治17）年9月に渡米する。それは、内村が渡米する2ヶ月前のことであった。新渡戸は、内村とは異なり、あくまでも留学が渡米の動機であり、主として三年間ジョーンズ・ホプキンス大学で史学、経済学などを学んだ。就中、新渡戸も内村同様コロンブスの400周年（1892）の記念行事を目前にしての渡米のタイミングであり、コロンブスにはかなりの関心のウエートがかかっていることは共通して見られる。特に新渡戸の場合、専門的に史学を修めただけに、後年書かれた『米国建国史要』（東京有斐閣、1919（大正8）年5月）のコロンブスに関わる言及は、中々の読み応えある文章の展開となっている。²³

ともあれ、内村と新渡戸のコロンブス理解は、19世紀^い否それまでの白人優位の時代的制約を受けての解釈となっている点は、万止むを得ないのではあるまいかと思われる。

（六）おわりに

本稿の冒頭（一）で示唆したように、コロンブスの行った事績の功罪の「功」の側面を今日の世界的風潮に逆行して、一当然そこには内村や新渡戸の生きた19世紀後半から20世紀前半にかけての未だ「罪」の側面を糾弾する機運熟していると思われぬ点は、如何ともし難いことではあったが、一その「功」の側面を通じて内村のコロンブス理解にも見るべき余地が残されているのではの思いで以って試論的にみてきた。

本文中で述べたようにコロンブスのアメリカ大陸『発見』400周年（1892）に際し、米国のシカゴで「コロンブス万国博覧会」が開催されるなど、世界の注目を浴びる一大行事が繰り広げられた。折しも内村鑑三自身、自己のプライベートな問題に喘ぎ、悶えながらまるで「見えざる御手」（“the Invisible Hand”）に導かれるかのように祖国日本を離れ米国を訪れた。そこで真の人生の在り方及びその方向性を見極める機会を与えられる一方、少なくとも19世紀末の当時において雄大且つユニークな世界観・人生観を持つコロンブスの人格的実在性を知り、ともすれば渡米直前及び渡米直後の内村鑑三個人にとっては数々の試練に遭遇している折でもあっただけに、²³ コロンブスとの出会いはさぞかし公私両面においてエンカレッジされるべきものが多くあったことであろう。

結局、内村は若き日における自己のプライベート・アフエアーズを通じて渡米し、その事に

よってコロンブスのアメリカ大陸『発見』400周年 (1892) の出来事と遭遇し、いたく啓蒙されて世界を知ることになった。内村のコロンブスに関する著述等の言動からみて、いかに彼がコロンブスに私淑・尊敬していたかは喋々するまでもないであろう。

ただ一つ、内村のみならず新渡戸についてもハンディキャップ的に指摘されることは、両者共に1930年代の前半までにこの地上を去っていることである。世界各国における、特に米国におけるコロンブス理解は、第二次世界大戦を媒介にして大きく180度の転回を示していることを知らなければならぬであろう。つまり20世紀後半から21世紀の今日にかけて、コロンブスの功罪の「功」の側面ではなく、「罪」即ち世界歴史における白人優位の立場で我が物顔的に振る舞ってきた嫌いのある言動に対して、20世紀末の500周年 (1992) を迎えるのをピークにして、コロンブスに対する風当たり、つまり歴史的評価の功罪が目に見えて変化し出して来たことである。その現実を直視しながら、もし内村鑑三、新渡戸稲造が更に20世紀後半以降生き続けていたならば、彼らはコロンブスに対してどのような評価の反応を示したであろうかということを使う反面、歴史の流れを一変させた第二次世界大戦とは、一体何であったのかということを使い巡らしながら、今後におけるコロンブスを廻る問題をむしろ包括的に考えていかねばならないことの必要性を覚えさせられる。

本稿は、その意味において古き時代、即ち19世紀末におけるコロンブスが最もポジティブな評価、即ち「功」のそれを受けた全盛時を意識しながら、内村鑑三の目を通してコロンブスとの関わりを不十分ながら見てきた。しかし、人物的にいかに偉大なる内村とても——無論、新渡戸の場合も同じであるが——時代の制約と影響を色濃く受けながら、彼らはむしろコロンブスの功の側面、即ちその長所にふれるのが精一杯であったのではあるまいか。第二次世界大戦以降、今日に至るも顕著に指弾され続けているコロンブスに対するネガティブな評価の側面を内村が看破し得なかったからといって、そのコロンブスへのアプローチが間違っていたとは筆者は毫も思はない。

かくして今や歴史の歯車は20世紀を大きくターンして21世紀に突入した。しかし、その冒頭の昨2001年において世界中を震撼せしめたあの「9.11米国同時多発テロ」(“The multiple terrorist attacks of 9. 11 in the U. S.”) の大波乱含みの異常事態は先行き不透明感を駆り立てる。この出来事がコロンブスの世界歴史において果たした役割、その功罪——特にその「罪」——との関わりの有無なども念頭に去来する。今後の筆者の取り組むべき課題の一つとして考えていきたいと思う次第である。

[付 記]

本稿は、近畿大学文芸学部『文学・芸術・文化』誌、第12巻第1号（平成12年3月発行）掲載の筆者による研究ノート「内村鑑三とコロンブス」（37～49頁）を踏まえ、独立に稿を立ち上げたものである。

[注]

1. 『発見』は、欧米中心の発想の表現であるのに対して、『到着』（或いは『出会い』）は発展途上国の観点からのものであり、今日では後者の使用が目につくところにコロンブスに対する今日的意義が垣間見られよう。
2. その前年の1991年は、幕末の漂流民ジョン万次郎が、1841（天保12）年に漂流・遭難し、一無名人の万次郎が図らずも日米交流の起点を打ち出し、1991年は特に「150周年記念」（Sesquicentennial Commemoration）として覚えられ、万次郎に関わる色々の行事が行われた。
3. 一例として、日本経済新聞（朝刊）1992（平成4）年8月3日付、社説「コロンブス五百周年の世界と日本」参照。
4. 著者による研究ノート『内村鑑三とコロンブス』近畿大学文芸学部「文学・芸術・文化」誌、第12巻第1号48頁の注(3)参照。
5. ラス・カサス著、林屋英吉訳『コロンブス航海誌』（岩波文庫、1977年9月）9～11頁参照。しかし、この問題については稿を改めて「罪」の側面をも論じ、最終的には「功」の側面共々その総合的評価を試みなければならぬ難問であろう。
6. 本稿の第（五）項参照。
7. サンサルバドルとは、スペイン語名 San Salvador であり、それは「救世主」即ち「キリスト」を意味する。歴史的にアメリカ大陸『発見』の端緒となったこの最初の島にコロンブスがかような名称をつけたことにより、彼のクリスチャンとしての自意識が端的に窺われるのではあるまいか。Cf. 注5参照。
8. 「大航海時代」は、かつては「地理上の発見」と言われていた。つまり、この用語はヨーロッパ側からの一方的な発想の響きがあるということで、「発見」され収奪された先住民側からの批判により、今日では「大航海時代」の用語が専ら用いられ、「地理上の発見」は廃語化している。Cf. 注1参照。
9. 大航海時代末期の17世紀初頭、大西洋岸沿いに英国植民地が建設された当初から開始され、初めのうちはゆっくりと進み、白人定着地の外側に当たるフロンティアがアパラチア山脈を越えるまでの植民地時代の一世紀弱の期間が経過しようとした『西漸運動』初期の頃を指す。
10. 米国では、最初首都が1788年にニューヨークに置かれ、次いで1790年にフィラデルフィアに、それから1800年に今日のワシントン D.C. に遷され、爾来202年の歳月が経過する。
11. “The New York Times” (Oct. 12, 1992) 参照。
12. 本文において、後述するように内村の米国への旅立ちより二ヶ月早くに、新渡戸稲造が米国へ留学の旅立ちをしている。両者共に、特に内村は身辺慌ただしく、相互に連絡を取り合う暇すらなかったようである。しかし、渡米後は、筆者の調べた限りでは、1885（明治18）年の6月に二回クエーカ派の信徒の集まりで両者は講演し、出会っている形跡が伺われる。（内川永一朗著、「永遠の青年 新渡戸稲造」新渡戸基金、2002年3月、307～308頁参照）

13. ルカ伝福音書11章9節。和文は、大正改訳(1917)、英文は欽定訳(1611)。
 14. 新島襄の渡米は、内村に先立つこと約二ヶ月。本文の中に記したように内村は新島からアーモスト大学入学の誘いを受け、シーラー総長との出会いを果す。それは、内村の人生の中で何物にも代えがたい貴重な人格的出会いの一コマであったことは、今日衆目の認めるところであろう。
 15. WASPは、White Anglo-Saxon, Protestantの略語である。米国では、周知のようにイギリス系の人々を中心となって植民が始まり、また建国が進められて歴史が形成されてきた経緯を彷彿せしめる印象をこの語から与えられるのではあるまいか。尤も、20世紀後半以降、混血が著しく進みワスプの総人口に占める割合が減りつつあるが、依然として米国社会の支配者層の主流としての影響力を善きにつけ悪しきにつけ残存していることは否めないであろう。
 16. 帰国直後、内村は新潟の北越学館に赴任、宣教師と教育方針を巡り衝突し三ヶ月で辞任。その後、東洋英和学校、東京水産伝習所、明治女学校等で教える。その時分(1889.7)に結婚。1891年1月、所謂「第一高等中学校不敬事件」に巻き込まれて不敬漢・国賊として非難追及され、失職し、肺炎に冒され、拳句の果てに同年4月に新妻の病没というまさに踏んだり蹴ったりの事態に直面したのである。
 17. この「コロンプス伝」は、内村の友人の渡辺秋造、高田増平の二者の助力によって編纂され、その際念入りな修正と加筆が施されて完成の日の目を見た。
 18. 山本泰次郎編、『内村鑑三信仰著作集⑥』(教文館、昭和37年7月)172、180頁。
 19. 山本泰次郎編、上掲書172～181頁。
 20. Cf. ラス・カサス著、林屋永吉訳、『コロンプス航海誌』(岩波文庫、1977年9月)9～11頁。
 21. 山本泰次郎編、上掲書178頁。
 22. 上掲、「研究ノート『内村鑑三とコロンプス』」、128頁
 23. 新渡戸稲造のコロンプスに関する見解の論述は、稿を改めて取り上げることにしたい。取り敢えず次に『新渡戸稲造全集—第三卷—』(教文館、昭和45年6月)に収録された『米国建国史要』の第一章及び第二章の目次に掲げられているコロンプスに関わる見出しを掲げておくことにしよう。(頁数省略)
- 第一章 米国の開発と世界の文明と
- 史的価値ある事実—— 亜米利加発見の意味—— 所謂「近世」の始—— コロンプス以前の亜米利加発見説—— コロンプス発見の価値—— 十五世紀末の欧州各国—— コロンプスの航海—— コロンプス時代の日本—— 西班牙人の失望—— コロンプスの末路—— 亜米利加発見を近世の起点とする理由六条—— 1. 地理的観念に於ける革命—— 2. 新富源の開発—— 3. 人生の新評価—— 4. 新思想の試験—— 5. 世界の粹を集む—— 6. 白人の勢力増殖—— 米国建国史の教訓
- 第二章 西班牙と仏蘭西との西半球に於ける植民事業
- 概説—— コロンプスの鶏卵—— 亜米利加発見の必然—— 東西洋の交通—— 東進して西進する説—— 葡萄牙の海外発展—— ヘンリー親王—— コロンプスの出現は時代の要求—— 西班牙の亜米利加開発着手—— 世界折半策—— 西班牙人の探検—— アメリゴ—— バルボア—— [以下、省略]
24. 本文中に示唆的にふれた内村鑑三の浅田タケとの破婚や上記の注16に記した諸々の出来事などを指す。

[参考文献]

1. 山本泰次郎編,『内村鑑三信仰著作集⑥』教文館, 昭和39年7月
2. 『内村鑑三全集1』岩波書店, 1981年1月
3. 『内村鑑三全集2』岩波書店, 1980年10月
4. 『新渡戸稲造全集-第三巻-』教文館, 昭和45年6月
5. 佐々木謙一編,『ニューヨーク情報辞典』研究社出版, 1988年10月
6. 亀井俊介編,『アメリカ文化事典』研究社出版, 1999年9月
7. 松村尅, 富田虎男編,『英米史辞典』研究社出版, 2000年1月
8. 海老沢有道編,『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 1988年2月
9. 斎藤真, 他三者編,『アメリカを知る事典』平凡社, 1986年8月
10. 朝日新聞社編,『世界史を読む事典』朝日新聞社, 1994年1月
11. 『政池仁著作集 19 内村鑑三伝』キリスト教図書出版社, 1996年1月
12. ラス・カサス著, 林屋永吉訳『コロンブス航海誌』岩波文庫, 1977年9月
13. 内川永一朗著,『永遠の青年 新渡戸稲造』新渡戸基金, 2002年3月
14. John Noble Wilford, "Discovering Columbus" from *The New York Times Magazine* (Aug. 11, 1991)
15. *The New Encyclopaedia Britannica*, vol 1. 16 (15th ed.), 1974.